経口避妊薬服用後妊娠または月経不順婦人妊娠による心身障害発生の防止対策に関する研究（分担研究報告書）

山形大学医学部産科婦人科学教室

広　井　正　彦

研　究　目　的

経口避妊薬服用後の妊娠例では，性ステロイドの卵に対する直接作用，排卵抑制による変性卵の受胎，投薬中止後の内分泌環境の変化などにより，催奇形性の可能性がある。また，月経不順婦人の妊娠に際しても，卵巣発育不全による内分泌環境の変化，卵胞期の延長にもとづく卵の変性の可能性が考えられる。従って，この因果関係を実験的に明らかにするために，以下の動物実験を行なった。

研　究　方　法

chinese hamster, ratなどを用いて，排卵卵子，受精卵の染色体異常の出現の有無，種々のホルモン投与後の妊娠末期における胎仔の異常発生の程度を検討した。投与したsteroidはprogesterone, norethistrone, ethynodiol diacetate, dydrogesterone, dehydroepiandrosterone acetateである。

研　究　結　果

(1) chinese hamsterで卵管内卵子の染色体異常出現率は，対照・離乳後第1周期・sophia C（経口避妊薬）200mg/day投与群でそれぞれ1.7%，5.4%，4.7%であった。また妊娠18.5日目の異常発生頻度は，それぞれ16.6%，25.6%，23.9%であった。なお，経口避妊薬中止後第2周期での妊娠18.5日目の異常発生は16.8%であった。このように生理的排卵抑制群と避任薬抑制群では，染色体異常と初期受精卵異常が増加し，その異常のタイプも類似しているために，避妊薬との直接関係より排卵抑制そのものが，異常発生に関与していると思われる。

(2) ratに妊娠前に0.05mg～0.5mgのovulenを投与して交尾させると，投与量が多い程，また投与期間の長い程，妊孕率が低下し黄体に対する胎仔数も低下した。そこで，交尾5日目の未着床受精卵を集め，42個の染色体分析を行ない，ovulen　投与による，染色体異常の出現率を検討中である。

(3) 妊娠前および妊娠初期にdehydroepiandrosteron acetate, norethisterone, ethynodiol diacetate, dydrogesteroneを投与し，胎仔の奇形の有無および男性化徴候の程度などを検討をした。ともに妊孕性に低下がみられたが，奇形例はみられず，肛門性器距離の延長がみられた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

経口避妊薬服用後の妊娠例では,性ステロイドの卵に対する直接作用,排卵抑制による変性卵の受胎,投薬中止後の内分泌環境の変化などにより,催奇形性の可能性がある。また,月経不順婦人の妊娠に際しても,卵巣発育不全による内分泌環境の変化,卵胞期の延長にもとづく卵の変性の可能性が考えられる。従って,この因果関係を実験的に明らかにするために,以下の動物実験を行なった。